

P1-009

食物アレルギーに関する講義後の保育専攻学生の意識・知識の実態調査(第2報) —自由記述に焦点を当てて—

中川 彩見、山本 裕子、郷木 義子

新見公立大学健康科学部看護学科

【はじめに】

食物アレルギーは生命を脅かす重大な問題であり、有症率は乳幼児期が最も高いため、保育現場でもエビペンの使用等による対応を求められる可能性は高い。保育専攻学生が、食物アレルギーに関する正しい知識、技術を習得し、保育現場で適切に対応することが望まれる。

【目的】

食物アレルギーやエビペンに対する効果的な講義内容の示唆を得るとともに学修継続に向けて検討をするため。

【方法】

1) 調査対象:2 大学の保育専攻 1 年生 146 人。2) 調査方法:「子どもの健康と安全」科目内で食物アレルギーに関して DVD 視聴、練習用エビペン演習実施後に無記名自記式質問紙調査を実施。3) 調査内容:食物アレルギーの知識を得たいと感じた理由、看護職未配置に対する考え、エビペン演習前後での印象の変化等。4) 調査時期:2020 年 12 月～2021 年 2 月。5) 分析方法:記述統計および質的データは意味内容の類似性に基づきカテゴリー化。6) 倫理的配慮:文書と口頭で研究説明を行い、アンケートの表紙に同意チェック欄を設け、自由意思のもと回答できるよう配慮した(新見公立大学倫理審査委員会承認番号:208)。

【結果】

有効回答率 84.9%。食物アレルギーの知識を得たい理由は、「子どもの生命・安全を守るため」[アレルギーをもつ児と関わる可能性の高さ][保育者として適切な対応をするために役立つ必要な知識]等 5 カテゴリー、看護職未配置に対する考えは、「保育者に必要な対応と知識の習得」[事前準備、訓練による組織全体への意識づけ][看護職不在の不安と配置の要望]の 3 カテゴリーが生成された。また、エビペン使用前は「未経験がもたらす不安」等 4 カテゴリー、エビペン使用後は「思ったより簡単に自分にもできそう」[実践に向けた判断への困難さと不安]等 6 カテゴリーが生成された。

【考察】

学生は、食物アレルギーについて、子どもの生命・安全を守るために保育者として知識をもつ必要性、組織全体で取り組む課題と認識し、また、エビペンが使用できそうと、学修意欲、自己効力感を高めていた。一方、食物アレルギーへの理解が深まったことで、自身が保育士として適切な対応ができるか否か実践を想定した不安も抱いていた。今後は、講義・DVD 視聴およびエビペン演習に保育現場を想定した、シミュレーション教育を取り入れる等、学生が自分でも対応できそうと思える学修機会の提供が必要である。

P1-010

北海道内の保育園における新型コロナ感染対策の現状

河崎 和子、佐々木 めぐみ

札幌保健医療大学保健医療学部看護学科

【序論】

2020 年 1 月日本国内初の新型コロナウイルス発生が確認され、患者数は急増した。当初は、小児の発生頻度は低く、ほぼ重症化はしないと報告がされていた。しかし、変異ウイルス感染者の増加に伴い、小児の感染者数が増加、小児集団でのクラスターが発生した。国内では、新型コロナワクチン接種開始の頃は、小児に対するワクチン投与の安全性が確認されておらず、小児はマスクや手洗い等の基本的感染対策で予防するしかない状況であった。さらに乳幼児のマスク着用は、誤嚥や窒息、熱中症の危険性が高まり、観察しにくいことから体調異変発見の遅れが懸念される。また、保育においては性質上、ソーシャルディスタンスについて困難が生じる場面が多い。2021 年 8 月、感染者が発生した保育所等の数は 3,516 か所、休園も相次いだ。保育施設における効果的な感染対策を検討するためには、保育士の立場から現状を把握する必要があるが、北海道内の保育園施設の感染対策の実態は明らかにされていない。そこで、本研究に取り組むことにした。

【研究目的】

保育園における新型コロナ感染対策の現状を明らかにする。

【研究方法】

各保育園へアンケートを郵送し、同意が得られた場合ポスト投函とした。

【調査期間】

2022 年 11 月～2023 年 1 月

【調査場所】

北海道内 A 市内のホームページ上掲載されている保育園施設 526 施設

【調査対象】

保育園の管理者

【測定用具】

2021 年の第 3 版「保育現場のための新型コロナウイルス感染症対応ガイドブック」などを参考にして作成した。

【倫理的配慮】

札幌保健医療大学研究倫理委員会にて承認を得ている。

【結果及び考察】

北海道内の A 市保育園 526 施設へアンケートを配布し、69 施設より回収された。大半の保育施設は、施設内の消毒や手洗いを実施して感染対策を実施している一方で、保育士の業務量が増加していた。感染対策や濃厚接触者対象などによって、保育士の体制は困難となり、負担が増大していた。園児は、年齢に応じて手洗いの指導やマスクの着用も実施していた。また、保護者の感染対策に関する協力や行事開催に関する理解への課題が明らかになった。保育士は、「保育」上、感染予防を遵守しながら、行政と保護者との間で困難感を有していた。そのため、今後、保育の特性を踏まえた感染対策を検討する必要がある。